

句集『天辺の桜』への道 心がけたこと

吉田以登

天辺に桜一樹を女帝陵 吉田以登

昭和 50 年頃、子育てに明け暮れしている日々の中で、ふと、何かを残したい気持ちが高まってきました。ちょうどその頃、近つ飛鳥の古墳山のほとりにまちの集会所が建ち、開かれた俳句教室に参加したのが、私の俳句への糸口になったのでした。

そんな折、「新聞にでも出してみたら！」と主人に言われて初めて投句しました。

桶の香と共に越より牡蠣届く 吉田以登

幸にも産経新聞「俳壇」の選句者を務めておられた皆吉爽雨先生のお目に止めていただきました。

そのご縁で、何もわからないまま爽雨先生が主宰されていた俳句結社「雪解」へ入門し、さらに俳句結社「うまや」への御縁ともつながり俳句を深く学ばせていただきました。

その後、主人の転勤に伴い、大阪から横浜、福井、大阪と転居を重ねましたが、何処かへ行ったり、嬉しかったり、悲しかったり、何かを感じるたびに、何となく「五七五」を書いていて句集『天辺の桜』の発行に繋がりました。

当初の内は、3人の子育てとの両立が大変でしたが、子どもころから俳句好きの祖父の見よう見まねで馴染んでいましたので、「人の真似をしない」、「心動いたことを句にする」、「なるべくその場ですぐに作る」ことを心がけながら作句に取り組みました。

万緑の窓辺以登さんの句集よむ 山家由紀

佐藤多恵子さんのお声かけで句集『天辺の桜』を回覧していただき、山家由紀さんがアカシア俳句会「夏季俳句会」にこのような俳句を寄せてくださり、またお読みいただいた皆さんがお気に入りを選句され、その結果をまとめてお届けくださいました。ありがとうございました。

俳句をご縁として三国丘高校七期生の皆さんとの交流が再開し、昔を懐かしみつつ又俳句を楽しむことができるようになって、大変嬉しく思っております。



掲載三百六十句中、選句三点以上を記載

	「選句」赤・主宰	「鑑賞」作品
主志由佑多秀	山焼きの焔の端に星一つ	
主佑秀	末の娘の乙女となりて卒業す	
由佑秀	母乗せし電車速のき花大根	
主志由佑多秀	吹かれても吹かれても蝶萩にあり	
佑多秀	母の手の影絵の狐鳴く障子	
由多秀	新樹より現れてめぐれり観覧車	
由佑秀	癒えし身に木犀の香を深く吸ふ	
志佑多	蟬時雨前山急に近づきぬ	
佑多秀	白山の水に祈りて坐禪草	
佑多秀	寒の水飲んで心音呼び醒す	
由佑多	滝しぶきより現れて蝶白し	
志佑多	緑陰の鹿青るところ風の道	
主志秀	軍鶏一羽潰し山家のぬくめ酒	

吉田以登三〇四「句集 天辺の桜」本阿弥書店 鑑賞「選句」
 参加者：茂恵一郎（主）、菅澤友子（多）、網 佑子（佑）
 山家由紀（由）、吉澤志保子（志）、前田秀一（秀）